

分科会A 国際化のなかにおける日本語研究

総括

鈴木 泰

かつて欧米では、日本語はエキゾチックな言語の一つと考えられていた。また、第二次世界大戦以後しばらくのあいだ、アジア諸国でも日本語を学習しようという気運はとぼしかった。が、最近欧米の言語学界ではよく引合に出される言語の一つになっているという。また、アジア諸国でも第二外国語として教育する国も出現するほどよく学習される言語になってきている。

また、日本語との対照研究という分野では、長いあいだ、英語を基準として、日本語を特殊な言語と見る立場が優勢であったが、最近むしろ日本語が他の諸言語を考える上での基準とされることもしばしばである。そうしたなかで、日本語にたいする諸外国の研究者の興味の焦点も大きく変わってきており、欧米系の言語と比較対照される場合も、今までにはなかった新たな点に焦点が当てられるようになってきている。

第一発表者の鄭寅玉さんの発表のテーマである、可能表現の問題は、最近日本語でもモダリティーの問題としての研究がようやく始まったところで、ここで行なわれた韓国語との比較対照は日本語の可能表現のモーダルな特徴を明らかにしたのものとして、日本語の可能表現の研究にも寄与するところが大変大きいものである。

第二発表者の方美麗さんの発表は、対照研究の実践として新たな方向を切り開いたものである。格がないという中国語の動詞をめぐる関係の表現を、格形式の発達した日本語と対照させることによって、明らかにしようとしたもので、対照研究の一つのあるべき方向を提示したものであるといえる。そして、形態的にはっきりした指標をもつ日本語のような言語との対照は、形態的に明確な指標をもたない中国語のような言語の分析に有益であることを十分に示している。

第三発表者のエリク・ロングさんの発表のテーマは大変に斬新なものである。定・不定の区別は英語などにはあるが、日本語にはないものとして、これまで十分に光が当てられてこなかったが、日本語にも、冠詞によるものでこそないが、定・不定の区別があることを明らかにしている。こうした事象を明らかにしたのものは始めてといってよいという意味で画期的な研究である。本発表では特定性をもつ名詞として、「現場、事件、遺体」などの新聞用語があげられているが、今後こうした観点から更に調査がすすめば、日本語における定・不定のカテゴリーの研究に進めることも期待できるであろう。

第四発表者の織田順子さんの発表のテーマは、日本語とブラジルポルトガル語の連体形式の使い方の違いを論じたものである。どんな言語にも連体法は存在するが、それが形成される仕方は実にさまざま、日本語では特定の形式が必要であってもポルトガル語では不必要であることもあれば、その逆も又あることを詳細にわたって明らかにしたのものとして、興味深い内容である。

以上のように、どの研究も日本語学や、それと対照される言語の学にあらたな研究分野を切り開くことが期待されるものであったということに、本分科会における討論の意義はあったといえよう。